広島大学附属三原学校園研究紀要　第２集　2012　pp. 129-134

かかわり学習

人間関係力育成のための実行委員制の要件の検討

—幼小中合同運動会小学校低学年男子団体競技「ハリケーンボーイズ」の場合—

長　野　由　知

１，はじめに

ハリケーンボーイズは，本学校園の幼小中合同運動会における小学校低学年男子の団体競技として長年取り組まれている。本年度からこの競技は，かかわり学習における学習材として位置づけられることになった[1)]。

かかわり学習とは，子どもたちに，広い視野に立ち，より直接的・体験的なかかわりを通して，「他者や集団と豊かにかかわり合う力」（以下，人間関係力）を育成することを目的とした本学校園独自の学習である。かかわり学習の取り組みには二つの柱がある。一つは異学年・異校種による交流学習，二つは幼小中合同行事である。ハリケーンボーイズは後者に位置づく。

この運動会の競技をはじめ，かかわり学習においては，その計画・運営に関わって，実行委員を決め，その子どもたちを中心にしながら学習を進めることが多い[2)]。しかし，その競技に参加する全ての子どもの人間関係力の育成をめざすというかかわり学習の目的を達成するためには，一部の子どもで編成されることになる実行委員を有効に機能させるための手立てを明確にする必要がある。実行委員制を採ることで，運営はスムーズになるが，ともすれば，競技の成功という子どもにとっての目標や人間関係力育成という教師側の目標が，実行委員のメンバーに留まり，全ての子どもを含むものになりにくいという落とし穴がある。

また，かかわり学習に取り組み始めて８年が経過するが，実行委員制の在り方についての議論は十分になされてきたとは言えない。これまでの実践事例を見ても，「実行委員制を採って何をしたのか」についての記述はあっても，「実行委員制をどのように位置づけ」，実行委員を中心にして「どのようにして子どもたち全員の人間関係力を高めていくのか」についての記述は見られない。

そこで，本稿では，新たに人間関係力育成のための学習材として位置づけられたハリケーンボーイズにおいて，実行委員による計画・運営を中心としながら，学習に取り組む全ての子どもの人間関係力を高めていくための要件を検討する。

２，研究の方法

本研究で対象とするのは，ハリケーンボーイズ競技者のうち，年長である小学校３年生である。また，対象とする期間は，下表１のとおりである。

表１　本研究の対象とする期間

６月７日	実行委員会始動
６月９日	事前調査
６月 13 日	運動会練習（８単位時間）
６月 25 日	運動会本番
６月 28 日	事後調査①
７月 21 日	事後調査②

研究の手順として，まずハリケーンボーイズにおける，３年生段階において育てたい人間関係力を明確にする。次に，設定した育てたい人間関係力に照らして実行委員制の要件案を整理し，試行する。試行にあたっては，本競技は赤・白・青・黄の４チームによって行われるため，各チーム２人ずつの実行委員の立候補を募り，合計８人の実行委員会を編成する。その後，試行前後の調査結果の変容を基に，実行委員制の要件を再考するこ

ととする。

3，３年生の目標と要件案の整理

(1) ３年生男子に育てたい人間関係力

３年生男子に育てたい人間関係力を表２のように整理した。年長学年として，競技に参加する全学年の仲間の思いを感じとりながら，競技全体の成功を視野に入れて判断・行動することに重点をおいている。設定にあたっては，筆者を含め指導にあたる教員が検討を重ね作成した[3)]。

表２　３年生男子に育てたい人間関係力

まわりのことを考え	１・２・３年生の全員の仲間の思いを感じ取りながら，競技を成功させたいという思いをもち，
適切に判断し	リーダーを支える自らの役割を考え，チームの作戦の成功だけではなく，競技の成功のために，やるべきことや１・２年生に伝えるべきことを考え，
行動化できる	競技の成功を実現するために，リーダーに協力しながら，１・２年生に伝わる方法でアドバイスや指示を出して働きかけたり，自らやって見せたりすることができる。

(2) 人間関係力育成のための実行委員制の要件案の整理

実行委員による計画・運営を中心とした人間関係力育成のための行事運営を進めるにあたって，実行委員制の要件案を図示したのが図１である。なお，要件案「①実行委員に計画・運営を委ねる」は，他の二つの要件案「②３年生のみでのふり返り・問題解決の場の保障」「③毎回の練習における異学年のかかわりの場の保障」の前提となっている。

①実行委員に計画・運営を委ねる
実行委員の子どもに練習の計画，練習の運営を行わせる。計画段階においては，教員は，実行委員がスムーズに話し合いを進めることができるように，指導・助言を行う。毎回の練習中は，実行委員に対しても，競技者全体に対しても，安全面に関わること以外はできる限り直接的な指導を控え，助言にとどめる。

②３年生のみでのふり返り・問題解決の場の保障
毎回の練習後には全体のふり返りの後，３年生のみでのふり返りの時間を設定し，学年のめあてを確認したり，自己の高まりに気づかせたりすることができるようにする。チームやグループがスムーズに練習をすることができたかなどの，リーダーシップを問うふり返りを毎回行う。また，学年全体で取り組むべき問題が生じた際には，問題解決を図る時間を保障することで，実行委員を中心に協力して，競技を成功させる意欲を高めることができるようにする。

③毎回の練習における異学年のかかわりの場の保障
各チームに１・２・３年生が同程度ずつ含まれるようにチームを編成する。毎回の練習時に，３年生の一人ひとりに１・２年生のペアに対する指導・助言の機会を保障し，３年生としての視野の拡大を促すことができるようにする。

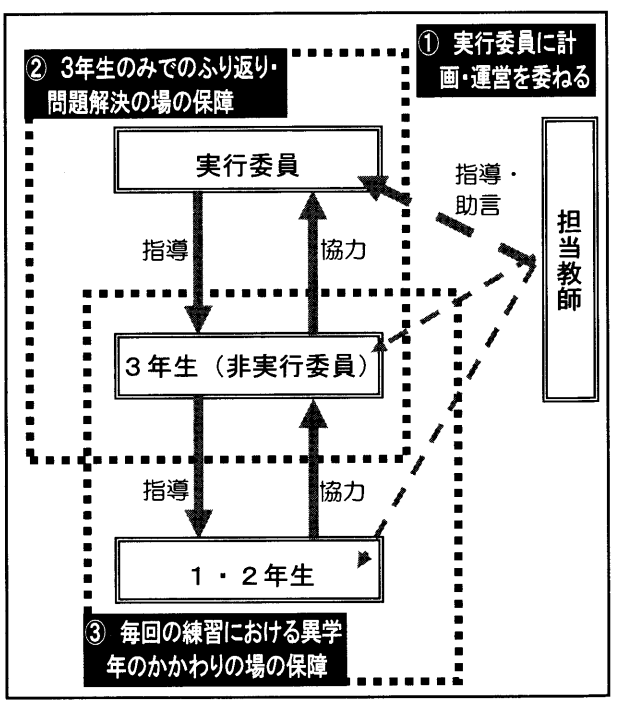

図１　人間関係力育成のための実行委員制の要件案

4，取り組みの実際

(1) 練習初期の様子

実行委員は，毎日の朝休憩，昼休憩，放課後な

どの空き時間を使い，練習の計画や準備を行った。その際，担当教師が必ず立ち会うようにし，いつでも相談を受けることができるようにした。

図２は，練習開始前の６月７日に作成した，実行委員の作戦ノート「ハリケーンボーイズノート」に記されている，本番までの見通しである。

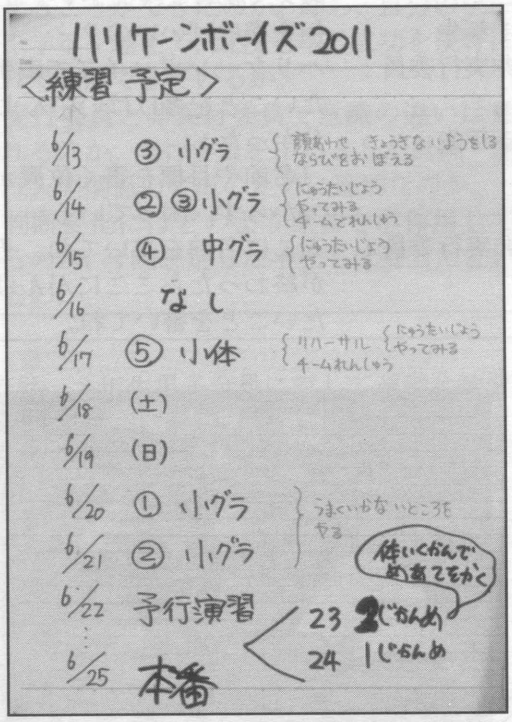

図２　「ハリケーンボーイズノート」に書かれた練習予定

リハーサルを練習５回目に位置づけ，早い段階で一通り競技を通すことができるようにしたいという気持ちがうかがい知れた。

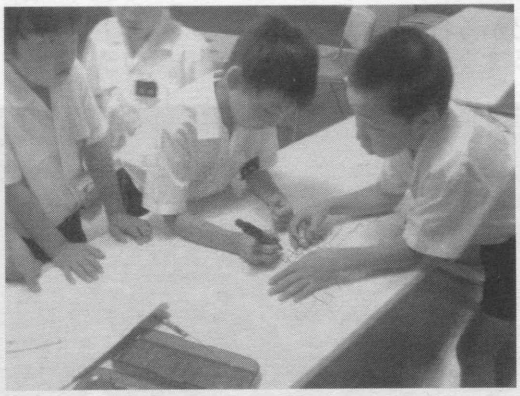

図３　実行委員の話し合いの様子

第１回目の練習（６月13日）の練習後の実行委員の子どもの日記である。

> 今日は大こんらんでした。１・２年は砂いじりをするし，３年はそれを注意しないし，先生は，何もしてくれないし。ハリケーンボーイズは１・２年でやっていたから，だいたい知っていたし，大した仕事はないだろうと思っていました。練習の後，作戦会ぎを何回もして，アイデアを出し合いました。明日からは３年生にもっと協力してもらえるように，やることを伝えておきたいです。

図４　１回目の練習の様子

この日の練習では，非実行委員もどのような行動をとってよいかわからない様子であった。実行委員は，練習後の実行委員会において，練習内容や並び方などを前もって３年生に伝えることを確認していた。実行委員が非実行委員との意識の溝を埋め，ともに協力して競技を成功させようとする意識がうかがえた。

(2) 練習中期の様子

練習後には３年生だけのふり返りが毎回行われるようになり，朝の会の時間を利用して非実行委員に対してその日の練習計画を伝え，協力を仰ぐようになる。「赤組，白組関係なく協力して競技全体を成功させたい」という実行委員の呼びかけに応えるように，練習に必要な道具の用意を進んで行ったり，１・２年に進んで働きかけたりする非実行委員が見られるようになった。

６月20日の練習では，入退場の練習が行われた。この日の朝会時には，実行委員から非実行委員に対して，「１年生や２年生に伝える時には，「わ

かる言葉で短く」，そして「動作もつけて」伝えるようにしましょう」という確認がなされていた。

練習時には，実行委員の全体に対する指示を，非実行委員が自分のペアに対してわかりやすく伝えようとする姿が見られた。

実行委員	：それでは格好いい駆け足の仕方を，やってみるので見ていてください。背筋ピーン。手は腰にガシャン。1・2トントン，1・2トントン。
非実行委員	：ほら，あんなふうにすればいいんだよ。1・2トントンって言いながらするよ。いっしょにするよ。せーの，1・2トントン，1・2トントン。

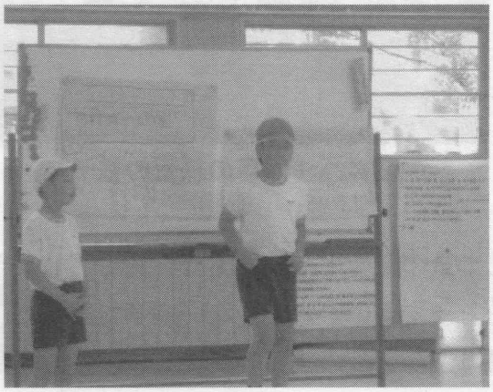

図5　身振り手振りで動きを伝える実行委員

入退場の在り方は，直接得点に関わるわけではない。競技全体の成功を視野に入れ，それを願っているからこそ，現れた姿である。

またこの頃，職員からは「例年以上に子どもの競技の習熟が早い」「成功させようという強い気持ちが伝わってくる」といった声が聞かれた。

(3) 練習後期の様子

「競技に参加する全員の気持ちを一つにしたい」という実行委員の願いから，スローガンを決め掲示物にすることになった。スローガンは，「ハリケーンボーイズ 2011 きょうりょくしてせいこうさせるぞ！！1・2・3・だー」である。

本番を目前に控えた6月23日，子ども一人ひとりが「本番で頑張りたい目標」をカードに記入し，スローガンが書かれた台紙にはる作業を行った。

実行委員	：本番で自分が頑張りたいことをこの紙に書いて，のりづけをしてから「1・2・3だー」の大きな紙にはっていってください。同じグループの3年生は，1・2年生にやり方を教えてあげてください。
1年生	：何を書けばいいの？
非実行委員	：ハリケーンボーイズで頑張りたいことを書けばいいんよ。
1年生	：分かったぁ。 （名前や目標を書く位置が分からず，困っている）
非実行委員	：ここに名前を書いてね。それが終わったらここにがんばりたいことを書いてね。

図6　低学年に寄り添う非実行委員

個人の目標を書く際には，3年生が自分の作業を後回しにして，1・2年生に働きかける姿が見られた。困っている様子を見かけて「ここに書いてね。」と，鉛筆で薄くかっこを書いてあげて，気づかう行動が見られた。

図7　できあがったスローガンの前で集合写真

5，取り組みの調査

(1) 調査方法

以下の目的で３年生に対する調査を行った。

＜調査の視点＞

○　３年生に育てたい人間関係力を身につけさせることができたのか。即ち，自分のチームや学年を越えて，競技全体の成功を視野に入れて判断できているか。
○　実行委員と非実行委員で意識の違いは見られるのか。実行委員を中心とした計画・運営は人間関係力育成のために適切なのか。
○　判断変化にはどのようなことが作用しているのか，今回想定した手立ては妥当だといえるのか。

調査は，３年生男子全員に対して運動会練習開始時，運動会直後，運動会１か月後に実施した。調査方法は，「ハリケーンボーイズにおける３年生の望ましい姿」について，以下の（a）～（f）６つの選択肢をランキングする質問紙である。

＜調査の内容＞

「ハリケーンボーイズ　大切な姿ランキング」をつくりましょう。よく考えて，１位～６位を決めてください。
(a)　チームのしょうりに向けて，作せんのアイデアをしっかり考えている。
(b)　自分たち３人ペアがかつやくできるように，よくそうだんしている。
(c)　他チームの子にアドバイスしたり，他チームのおうえんをしたりしている。
(d)　同じチームのなかまに，こつを教えたり，はげましたりしている。
(e)　入たい場やきょうぎの仕方をよくする方ほうをしっかり考えている。
(f)　自分のペアの１・２年にコツを教えたり，はげましたりしている。

６つの選択肢は，「自分のペア内の関係を視野にした判断」（(b)，(f)），「自分のチーム内の関係を視野にした判断」（(a)，(d)），「競技全体の成功を視野にした判断」（(c)，(e)）を混在させ作成した。子ども一人ひとりが作成したランキングの変化から，子どもの判断変容を分析する。

なお，運動会後，１か月後の調査は，運動会練習開始時と同様の形式で行い，加えて，各自のランキング変化のきっかけを問い，回答を求めた。

(2) 調査の分析と考察

図８は，「競技全体の成功を視野にした判断」を，ランキングの上位（１位・２位）に位置づけた子どもの割合の変容である。

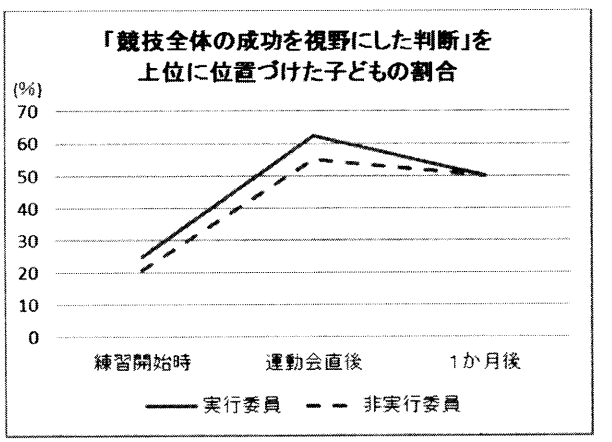

図８　「競技全体の成功を視野にした判断」を上位に位置づけた子どもの割合

運動会練習開始時において，「自分のペア内の関係を視野にした判断」「自分のチーム内の関係を視野にした判断」をランキング上位に位置づける子どもが多く，「競技全体の成功を視野に入れた判断」をする子どもは少なかった。

しかし，運動会直後，運動会１か月後には，練習開始時に比べて，「競技全体の成功を視野に入れた判断」をした子どもが増加している。また，１か月後には実行委員（実線），非実行委員（点線）は，非常に似た推移を示しており，ここに有意な差は見られない。

図９は，運動会後１か月後の調査において判断変化の背景について尋ねた結果である。「判断変化のきっかけ（１か月後調査）」によると，教師とのかかわりを判断変化のきっかけとしてあげた回答は少なく，子ども同士のかかわりを判断変化のきっかけとしてあげた子どもが多いことが分かる。このことは，要件案「①実行委員に計画・運営を委ねる」ことが，子どもの判断変化に有効に

働いたことを意味している。

また，判断変化のきっかけとして，「チーム練習時の異学年とのかかわり」や「ふり返りや話し合い」を理由とした子どもが比較的多い(実線部)。このことは，要件案「②３年生のみでふり返り・問題解決の場の保障」や「③毎回の練習における異学年のかかわりの場の保障」の有効性を意味していると考えられる。

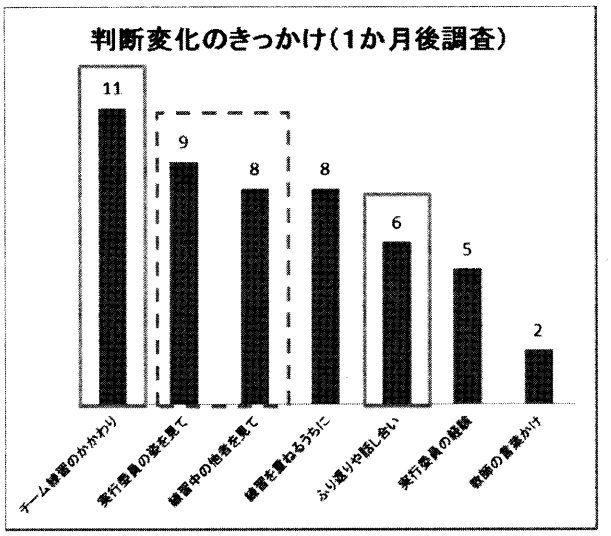

図９　判断変化のきっかけ（１か月後調査）

そして，「実行委員の姿を見て」「練習中の他者を見て」を判断結果のきっかけとしてあげる子どもが少なくない（点線部）。これは，準備や練習の場面において「他者の姿を見てがんばりに気づかせること」が子どもの人間関係力の育成に有効に働く可能性を示していると考えられる。

６，おわりに

本稿では，本学校園の幼小中合同運動会低学年男子団体競技「ハリケーンボーイズ」を事例に，小学校３年生段階における実行委員制の要件案について検討を行った。

「①実行委員に計画・運営を委ねる」「②３年生のみでのふり返り・問題解決の場の保障」「③毎回の練習における異学年のかかわりの場の保障」を実行委員制の要件とすることで，取り組み前に比べ，実行委員，非実行委員を問わず，１・２年の存在や競技全体の成功を視野に入れて判断する子どもの割合が増加した。また，子ども同士のかかわりが，子どもの判断変化を促すことが明らかになった。このことは，３年生段階においても実行委員の計画・運営が可能であり，人間関係力の育成に有効に機能することを意味している。

今後の課題として，未だ「自分のペア内の関係」「自分のチーム内の関係」といった，狭い視野で判断する子どもが存在していることがあげられる。要件「①実行委員に計画・運営を委ねる」に関わって，実行委員や非実行委員のがんばりや適切なかかわり方に気づかせ，判断変容を促す指導・助言の在り方について更なる検討が必要である。

また，かかわり学習における取り組みの類型整理と，その類型に応じた要件整理の必要を感じている。本稿で対象としたハリケーンボーイズは，異学年合同の取り組みである。今回検討した要件が，他の単一学年での取り組みに直ちに適用できるとは限らない。かかわり学習における指導方法の体系化を図るための今後の課題としたい。

＜注および引用文献＞

1)　「ハリケーンボーイズ」とは，一般に「台風の目」と呼ばれる競技である。本学校園では１・２・３年生男子が縦割り４チームに分かれ，チーム内で異学年のペアを編成して実施している。

2)　本学校園のかかわり学習の取り組みについては，広島大学附属三原学校園『平成 23 年度第 14 回幼小中一貫教育研究会要項　幼小中一貫の教育力を生かした創造的問題解決能力の育成－国際的資質としての人間関係力を基盤として－（２年次）』，2011，pp. 41-61 を参照されたい。また，かかわり学習の歴史については，広島大学附属三原学校園『幼小中一貫で育てる「かかわり力」』，渓水社，2010 を参照されたい。

3)　かかわり学習の目標設定については，上掲研究会要項 p. 45 表１「12 年間の区分と目標」を受けて作成している。ハリケーンボーイズの１・２年生男子に育てたい人間関係力については，同 p. 49 を参照されたい。